講演録

希望のチカラ

LS研究委員会 総合発表会2012「特別講演」

東京大学社会科学研究所 教授 **玄田 有史** 氏

げんだゆうじ 1964年島根県生まれ。東京大学経済学部卒業。経済学博士（大阪大学）。東京大学社会科学研究所教授。専門は労働経済学だが、2005年より「希望学」という新しい学問を始める。東日本大震災復興構想会議専門委員会委員も務めた。『仕事のなかの曖昧な不安』（中央公論新社、サントリー学芸賞他）、『ジョブ・クリエイション』（日本経済新聞社、エコノミスト賞他）、『希望のつくり方』（岩波新書）他著書多数。

希望はいつ生まれるか

希望とは「Wish for Something to Come True by Action（行動によって何かを実現しようとする気持ち）」と私たちは定義しました。私は2005年から「希望学」という研究を始めました。希望学を始めた頃、インターネットなどの情報検索システムを開発されている方に、「希望」という言葉に最も関係の深い言葉を新聞のデータベースで検索していただいたところ、「水俣」という言葉が出てきて驚きました。これは、熊本県水俣市の水俣です。水俣市は、現在では環境都市づくりを推進し、「環境首都」に選ばれるなど風光明媚な土地ですが、戦後最大の公害問題の一つ水俣病が起きた土地でもあります。「希望」という言葉と深くつながっているのは、この水俣病の水俣です。ここから想像されることは、苦しい状況から変わっていくために必要とされるのが希望なのではないかということです。

希望と似た言葉に、「幸福」や「夢」がありますが、これらは似て非なるもの。幸福は、今の状態が長く続いてほしいと願う気持ち、夢は、無意識に自然発生的に生まれるものです。それに対して希望は、変化することを望む気持ち、非常に意識的なものに思われます。

阪神・淡路大震災や東日本大震災の後に、新聞やテレビで「希望」という言葉が頻繁に叫ばれました。「日本は閉塞感があふれていて希望がない」など、否定的に使われることが多かった「希望」という言葉が、昨年の3月11日以降は、「苦しいけれども希望を捨てない」「希望はある」といったように、未来に向かって前向きに進むための言葉として使われています。希望という言葉が使われないのは、よい時代なのかもしれません。人々は苦しい状況の中で、希望を必要としています。

希望はつくるもの

そもそも希望とは何でしょうか。私は、希望は4本の柱から成り立っていると考えています。1つ目は「wish」（気持ち）です。強い気持ちや意志を持つことは、未来に向かって進むために非常に大切です。そして2つ目は「something」（何か）。自分にとって大切な「何か」、未来にこうあってほしいという具体的な「何か」を定めることです。それは、誰かが考えるのではなく、自分で考えていかなければならないものです。3つ目はsomethingを「come true」（実現）すること。どうしたら実現できるのか、その道筋や作戦を考えることは、希望にとても大事なことです。そして4つ目は、「action」（行動）です。どんなによい作戦を考えても、行動しなければ実現できません。そして、これら4本の柱が「Wish for Something to Come True by Action（行動によって何かを実現しようとする気持ち）」という希望の定義を支えているのです。

私は、高校や中学校から依頼される「生徒が希望を持てるような話」というテーマの講演では、「希望が見つからなくても大丈夫。希望はつくれるよ」と話します。希望が見つからないときは、それを支える4本の柱のうち、どれが欠けているかを探すことが大切です。欠けている柱を見つければ、希望はつくれます。例えば、「役者になりたい」という自分にとって大切なsomethingを持っていても、落ちてもオーディションを受け続けるというactionが欠けているから実現できないのかもしれません。そういう気づきが、希望をつくっていくのです。

また、たとえ希望がすぐには見つからなくても、それを探し続けること自体が尊いことであると思います。私が夢や希望を求め続けること自体が誇りのある行為だと思ったきっかけの一つに、岩手県釜石市での出会いがあります。釜石市は明治以降、大きな津波の被害を二度も受けたり、戦争で町が壊滅したり、その他にも多くの挫折を経験し、それをくぐり抜けて現在に至っている町です。釜石で故郷のために頑張っている老人は、「夢を持って死んでいくのが夢だ」と中学生に語りました。また昨年4月、日にちや曜日の感覚がない状況の中でカレンダーをお配りしました。実現させたいことや自分自身の思いを書き込んでいかれたのでしょうか。とても喜ばれました。私は、希望が持つ力の大きさを、釜石の人々から学びました。

“緩やかな絆”の重要性

東日本大震災後、希望と同時に「絆」という言葉が盛んに使われるようになりました。「希望」と「絆」には深い関わりがあり、「希望がない」という人は、本当に信頼できる人がいないなど、孤独な傾向にある人が多いのです。

社会学の中で絆を研究している学問があります。「絆」は英語では「ties」などと呼ばれますが、絆にもいくつか種類があります。例えば、家族や友人、地域といった、理屈や損得抜きで応援してくれる強い結びつきの「strong ties」、その反対に、弱い、緩やかな絆の「weak ties」です。weak tiesで結ばれている人とは、たまにしか会わないけれども、信頼関係でつながっている人、自分とは異なる環境にいて、未知の情報や価値観を教えてくれる緩やかなネットワークにある人々です。アメリカの研究でも、例えば転職をする際に、weak tiesをたくさん持っている人は、そこから新しい情報やヒントになる気づきを得ることができ、成功することが多いと言われています。転職も未知の世界への挑戦ですから、自分一人の限られた知識とは別の広い世界とのつながりを持つことが成功の鍵のようです。

自分と同じ情報を持っており、阿吽の呼吸でわかり合える強い絆「strong ties」は、安心感を与えてくれます。一方、緩やかな絆「weak ties」は、何か（something）を見つける、こうすれば実現（come true）できる、そのためはこのような行動（action）をすればよいといった気づきを与えてくれます。その気づきが、わからない中でも進んでみようという勇気や希望につながるのではないかと思います。

日本は、強い絆とあわせて緩やかな絆を大事にする社会になってきました。プロジェクトを進める際は仲間が集まり、終わったら離れ、時にはまた出会います。LS研究委員会でも、お互いが新鮮な気づきを得ることで、自分の可能性を広げられたのではないでしょうか。こうして培ったものが、weak tiesとなっていくのです。家族の絆も大切ですが、緩やかな絆がどんどん広がっていくことが、先のわからない未来を生き抜くための非常に大きな柱になると思います。

希望を力にする

私は、横澤彪さんが吉本興業の新人研修で話された、「壁にぶつかったら、壁の前でちゃんとウロウロしていること」というお話がとても好きです。社会に出れば、簡単には乗り越えられない、さまざまな壁にぶつかります。そのときに大切なのは、立ち止まらないで、壁の前でちゃんとウロウロすることです。そうすれば、ある日小さな穴を発見したり、突然、壁が崩れたり、ヘリコプターに乗った人に発見されて、壁の向こう側に行けるかもしれません。

さらに、「大丈夫!」と声に出すことも必要です。困難な状況で「大丈夫?」と聞かれると、何となく不安な気持ちになりますが、「大丈夫だ!」と言われれば元気になります。ですから、「ちゃんと壁の前でウロウロしていれば大丈夫!」などとあえて声に出すことで、希望を持って進んでいけるのだと思います。

以前、宇宙飛行士の選抜試験官をされている方から、興味深いお話を伺ったことがあります。それは、最終の面接試験での質問「あなたは桃太郎と浦島太郎のどちらのタイプに近いですか?」に対する回答が、合否に重要な決め手になるということです。桃太郎は、鬼ヶ島に鬼退治に行くという明確なビジョンを持ち、成功率を高めるために仲間とプロジェクトチームを組み目的を遂行する戦略家。一方、浦島太郎は、かわいそうに思って助けた亀に誘われて竜宮城に行き、欲望のままに時を過ごした揚げ句、決して開けてはいけないと言われた玉手箱を開けてしまい、お爺さんになってしまう。非常に情緒的で行き当たりばったりの行動です。

選抜試験の最終面接まで残る人は、当然、目的意識が高く、手段も万全、自分自身を含めた意識向上ができる桃太郎タイプの人です。しかし、宇宙というところは何が起こるかわからない未知の世界です。マニュアルにない不測の事態に遭遇したとき、柔軟に対処するには、よい意味でのいい加減さ、何とかなるさという心の余裕を持つ浦島太郎的な要素を持つことも非常に重要だということです。

希望も宇宙同様、実は、よくわかりませんが、未来につながっているだろうということは予測できます。では、未来とは何かと言うと、こちらもよくわかりません。このわからない中で立ち向かっていくために必要なものが希望なのかもしれません。浦島太郎的なよい意味での開き直りを持ちながら、自分には、熱い気持ちや大切なものがあるだろうか、困難な状況で実現をあきらめてはいないだろうか、行動はしているだろうかという4本の柱を常に確認しつつ、自分にとっての希望を見つけていくことが大切です。希望が見つからないときには、心の窓を開いて、いろいろなところに緩やかな絆を広げていく。今すぐプラスにならないといった損得勘定は捨てて、とにかく自分の知らない世界の人々と緩やかにつながっていく。そこで気づきを得ることが、自分自身の希望をつくっていくことにつながるのではないかと思います。